

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

保谷民博関係人名録

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立民族学博物館 公開日: 2021-07-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 朝倉, 敏夫, 飯田, 卓, 井上, 潤, 卯田, 宗平, 加藤, 幸治, 菊池, 暁, 木村, 裕樹, 小島, 摩文, 小林, 光一郎, 齋藤, 玲子, 坂野, 徹, 永井, 美穂, 野林, 厚志 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00009823

保谷民博関係人名録（団体名）

●会津銀行（?-1941）

あいづぎんこう

【事績】

福島県に拠点を置いた地方銀行。昭和初期の全国的な金融恐慌時に、福島県内では有力地元銀行が相次いで破綻し、辛うじて生き残ることができた地元銀行は会津銀行を含めて11行（うち普通銀行は9行）のみだった。日華事変ののち、政府は戦時統制経済の一環として「一県一行」主義を唱えて銀行合同を強力に推進し、福島県内に残存していた銀行のうち経営がしっかりしていた郡山商業銀行と会津銀行、白河瀬谷銀行の3行を中核として、1940年に合併勧奨を行った。1941年11月4日、3行の対等合併により東邦銀行が創立された。（東邦銀行編 2011）

【コレクションとの関係】

1934年に福島県や栃木県で集めた履物や笠、衣類など約40点をコレクションに加えた。

----- 執筆者：井上潤

●うさぎや（?-?）

うさぎや

【事績】

原田忠一が経営した古書店。渋沢敬三が日本実業史博物館構想を進める中で、複数の古書店や古美術商が博物館準備室から依頼を受けて資料収集活動にあたった。うさぎやの原田はそのひとりで、他に甲州文庫の功力亀内や粋古堂の伊藤敬次郎、木内書店の木内誠らがいる。収集の第一番目は、1937年6月12日付、うさぎや納品の錦絵36点である。（国文学研究資料館（DVDビデオ）2006-2007；大谷 2015）

【コレクションとの関係】

1936年から1937年にかけて千葉県や群馬県、福島県、埼玉県などで集めた民具など70点あまりをコレクションに加えた。

----- 執筆者：井上潤

●A・M (1921-1942)

エイエム

【事績】

渋沢敬三が主宰したゆるやかな集まり「アチックミュージアム」(以下「アチック」)のこと。A・M同人とはそれに関わった人びとを指し、A・M旅行団とは、アチックの活動の一環としておこなった調査旅行の一行を指す。この会は、初期には「アチック・ミュージアム・ソサエティ」と呼ばれたため、「A・M」は「A・M・S」などと記されることもある。

渋沢が仲間たちと自然史標本を持ちよってアチックの活動を始めたのは、東京帝国大学法科大学経済科に入学する1918年頃で、会合の記録が残っているのは1921年からである。1922年から1925年までは、渋沢がロンドンに赴任したため活動が停滞するが、1925年の暮れに渋沢はアチックの「復興第1回会合」を開き、玩具研究をチームで進めることを宣言した。

玩具収集を中心とした活動は、1920年代終盤から多様化しはじめる。1930年代中盤に刊行されたニュースレター『アチックマンズリー』を見ると、「文献索隠(索引)編集室」「漁業史研究室」「民具研究室」という、少なくとも3つの活動を柱としたことがわかる。その活動の成果は、「アチックミュージアム彙報」や「アチックミュージアムノート」などのシリーズとしてまとめられている。

国立民族学博物館に引き継がれている標本資料は、直接的には民具研究室の活動に関わって収集・整理されたもので、磯貝勇や高橋文太郎、宮本馨太郎といった人たちの貢献が大きい。しかし、収集に関わった人たちはそれだけにとどまらず、渋沢本人や彼と旅行をともした人たち、仕事仲間、知人などにまでおよぶ。これらの資料は、アチックの活動開始から四半世紀後の1937年、日本民族学会(のちの日本民族学協会)に寄附された。アチックはその後、博物館機能を失うが、1942年に日本常民文化研究所と改称してからも広く民衆史の研究を担い、その活動は現在、神奈川大学日本常民文化研究所に受け継がれている。(渋沢 1992a; 1992b; 横浜市歴史博物館・神奈川大学日本常民文化研究所編 2002; 国立民族学博物館編 2013)

【コレクションとの関係】

日本各地から集めた玩具や民具約1,500点をコレクションに加えた。上述したとおり、アチック同人が収集したといっても、具体的にどのような人物だったかはわからない。しかし、一定の時期に一定の地域から多数の資料が集まっている場合には、東京に拠点を置いていた同人がアチックの研究活動の一環として資料を集めた可能性が高そうである。

----- 執筆者：飯田卓

● 営林署（?-?）

えいりんしょ

【事績】

日本において、国有林を管理するため各地に設置された林野行政機関。現在は農林水産省林野庁に所属しているが、1943年までは農林省山林局に所属していた。

【コレクションとの関係】

保谷民博コレクションのなかには、採集者が「営林署」となっている資料が30点あまりある。ほとんどが青森県の営林署（碓ヶ関営林署、金木営林署、三本木営林署、川内営林署、増川営林署）であり、唯一の例外は岩手県の川井営林署である。興味深いことに、資料管理原簿の「寄附者」欄（データベースではプライバシー保護のため非公開）をみると、ほとんどの資料の寄附者は河田杰である。林務官僚として活躍した河田は、人びとの暮らしと密接に関わった営林署に民具収集の協力を依頼したのかもしれない。

----- 執筆者：飯田卓

● コロンビア政府（1810- ）

ころんぴあせいふ

【事績】

国名の正式名称はコロンビア共和国。南アメリカ大陸の北端に位置する。（洪沢 1993a）

【コレクションとの関係】

1957年に80点近くの標本資料をコレクションに加えた。この年、日本民族学協会の会長だった洪沢敬三が、外務省の移動大使として中南米諸国を歴訪した。そのときの体験は洪沢の『南米通信—アマゾン・アンデス・テラローシャ』（1958年、角川書店）に詳しく、コロンビアでの体験は同書の「第一—信」に述べられているが、コロンビア政府の要人が民族誌資料を寄贈したと思わせる記述はない。

----- 執筆者：飯田卓

●三溪園 (1906-)
さんけいえん

【事績】

生糸貿易により財をなした実業家 原富太郎 (三溪、1868-1939) が築いた庭園。175,000平米におよぶ庭園で、京都や鎌倉などから移築された歴史的に価値の高い建造物が巧みに配置されている。敷地は養祖父 原善三郎が購入していた横浜の南東部 本牧に広がる広大な土地で、原はここに本邸を移すと同時に、古建築を移築し、1906年5月1日から現在の外苑部分の一部を公開した (ただし外苑の完成は1914年)。内苑は1922年に完成するが、震災・戦災を経て初公開されたのは1958年。

三溪の存命中は、新進芸術家の育成と支援の場となり、前田青邨の「神輿振」や横山大観の「柳蔭」、下村観山の「弱法師」など、近代日本画を代表する多くの作品が園内から生まれた。その後、戦災により大きな被害を受け、1953年に原家から横浜市に譲渡・寄贈されるのを機に、財団法人三溪園保勝会 (現 公益財団法人三溪園保勝会) が設立され、復旧工事を実施した。

【コレクションとの関係】

三溪園保勝会が1960年に岐阜県大野郡荘川村で集めた資料をコレクションに加えた。

----- 執筆者：井上潤

●清水組 (1804-)
しみずぐみ

【事績】

現在の清水建設株式会社の前身。越中国出身の初代 清水喜助 (1783-1859年) が1804年に江戸神田鍛冶町で大工を開業し、清水屋と号したのが始まり。清水屋は、幕末明治期に築地ホテル館や三井組ハウスなど洋風建物の設計・施工を受注し、渋沢栄一邸も手掛けて渋沢の信頼を得た。1887年に栄一を相談役に迎え、日清日露戦争期を経て業容を拡大し、1915年に合資会社清水組に改組。技術向上と経営合理化に努め、1937年に株式会社となった。(清水建設株式会社編 1953; 2003)

【コレクションとの関係】

1929年に東京都で集めた枅や箭矢をコレクションに加えた。備考欄を見ると「上棟式用」「渋沢家上棟式用」などと書かれており、三田綱町にあった渋沢敬三の邸宅を改築するさい

の上様式で用いられたものと推測できる。

----- 執筆者：井上潤

● 松壽館（?- ）

しょうとうかん

【事績】

静岡県沼津市内浦三津のホテル。三津は「みと」と発音する。1932年1月から5月まで渋沢敬三がこのホテル（当時は旅館）に長逗留し、のちの日本農学賞受賞（1940年）のきっかけとなる「豆州内浦漁民史料」に出会った。当時、三津は田方郡内浦村に属していた。渋沢が長逗留した理由は、前年に東京貯蓄銀行会長に就任したり、祖父 渋沢栄一の逝去にさいして葬儀委員長を務めたりするなど、多忙のあまり急性糖尿病を患ったため。滞在中、敬三は子爵となったばかりだったが、地元の漁師 菊地伝次郎と釣りに出て漁のことを学ぶなど、進んで民衆のくらしに接した。（横浜市歴史博物館・神奈川大学日本常民文化研究所編 2002）

【コレクションとの関係】

1933年3月に静岡県田方郡内浦村で得られた削りかけをコレクションに加えた。

----- 執筆者：飯田卓

● 西北ネパール学術探検隊（1958）

せいほくねぱーるがくじゅつたんけんたい

【事績】

当時としてはめずらしく、大学が事業主体とならず、財団法人日本民族学協会や京都大学生物誌研究会が後援して実現したエクスペディション。隊長は川喜田二郎（登山・民族調査担当、当時大阪市立大学助教授、のちに東京工業大学教授、筑波大学教授、中部大学教授）、副隊長は小方全弘（登山担当、当時同志社大学学生、のちに印刷会社経営、日本・ブータン友好協会事務局長）、隊員は高山龍三（民族調査担当、当時高校教師、のちに大阪工業大学教授、京都文教大学教授）、飯島茂（民族調査担当、当時京都大学大学院生、のちに東京外国語大学教授、東京工業大学教授、桜美林大学教授）、西岡京治（植物農学・登山担当、当時大阪府立大学大学院生、のちに海外技術協力事業団専門家）、並河治（植物農学・登山担当、当時京都大学大学院生、のちに神奈川県勤務）、曾根原恵夫（登山担当、当

時京都大学学生、のちに住友商事勤務)、大森栄(読売映画社カメラマン)。(飯島 1960; 高山 1960; 1980; 1993; 川喜田 1961; 1966)

【著作】

川喜田二郎『鳥葬の国—秘境ヒマラヤ探検記』光文社、1960年〔増補改訂版 講談社、1992年〕。

川喜田二郎(編)『チベット人—鳥葬の民』角川書店、1960年。

大森栄『秘境ヒマラヤ』二見書房、1960年。

飯島茂『ネパールの農業と土地制度』アジア経済研究所、1961年。

川喜田二郎・高山龍三『ヒマラヤ—秘境に生きる人びと』保育社、1962年。

高山龍三『失われたチベット人の世界』日中出版、1990年。

【コレクションとの関係】

ネパールで集めた443点の資料をコレクションに加えた。1959年4月14日の読売新聞によると、探検隊の持ちかえった資料が「ネパール展」と題する展示会で公開されたという。主催は読売新聞社、会場は東京銀座の松屋、会期は1959年4月17日～22日だった。また、高山龍三氏によると、同年7月18日～29日には大阪の松坂屋で展示会が開かれ、他に福岡の岩田屋でも展示会が開かれたという。

----- 執筆者：飯田卓

● 赤春堂 (???)

せきしゅんどう

【事績】

東京市(現 東京都)豊島区池袋二丁目の古書店。昭和初年頃より活気を呈し1933年頃から1940年頃まで『フルボン』という小冊子を刊行した。1942年、日本実業史博物館準備室に資料を販売している。(反町 1990; 青木陸編 2008)

【コレクションとの関係】

1936年に、山梨県西八代郡市川大門町の算盤をコレクションに加えた。

----- 執筆者：永井美穂

● 積雪科学館（1949-1968）

せきせつかがくかん

【事績】

1948年10月、北越製紙株式会社社長だった田村文吉が有志と相はかって設立した財団法人積雪研究会の附属機関で、1949年2月18日に開館した。建物は長岡工業専門学校（新潟大学工学部の前身）の旧工業博物館を借用し、雪国の住宅模型や除雪車などを展示した。また、積雪科学館では雪国の生活を特集した「積雪シリーズ」と題する小冊子が、1952年から1957年にかけて、都合9冊刊行された。1968年に閉館。1970年4月10日、長岡市立科学博物館郷土史料館1階に「雪国の民俗」展示室が新設されるにともない、同館が積雪科学館旧蔵の雪国の民具355点を受け入れた。それに先立ち、収蔵民具の調査、整理を担当したのが、宮本馨太郎をはじめとする立教大学第1回学芸員課程実習の参加者たちである。（八幡編 1956; 長岡市立科学博物館編 1970; 倉内・伊藤・小川・森田編 1981）

【著作】

積雪科学館（編）『まどのゆき（継続後誌「窓の雪」）1～45号』積雪科学館、1954-1962年。

【コレクションとの関係】

1953年に新潟県で収集された藁沓、藁帽子2点をコレクションに加えた。なお、1956年7月17日、積雪科学館における「皇太子殿下同館御成の際の特別陳列」に際して、保谷の民族学博物館から「ギリヤークのスキー」を貸出している。

----- 執筆者：木村裕樹

● 第一銀行（1896-1971）

だいいちぎんこう

【事績】

前身は、1872年の国立銀行条例にもとづいて1873年に設立された株式会社第一国立銀行。1896年に株式会社第一銀行と改称し、都市銀行として活動を展開した。さまざまな合併をくり返したため、太平洋戦争開始後の数年間は第一銀行の名称がなくなったこともあったが、そのブランド力は根強く1971年に第一勧業銀行となるまで持続した。

保谷民博コレクションの基礎を築いた渋沢敬三は、1926年から1942年まで第一銀行に勤務して取締役や副頭取も務めた。

【コレクションとの関係】

保谷民博コレクションのなかには、第一銀行の支店を「採集者」とするものが50点あまりある。京都府の京都支店（約20点）、愛知県の名古屋支店（約15点）と豊川支店（約20点）、福岡県の小倉支店（数点）である。採集期はいずれも1927年から1928年にかけてであり、渋沢がイギリス駐在から帰国したばかりで資料数が増えはじめる時期にあたる。銀行の地方支店は、郷土資料に関心をもつ渋沢にとって、格好の情報源だったらしい。

----- 執筆者：飯田卓

● 高岡銀行（1885-1943）

たかおかぎんこう

【事績】

富山県高岡市に本拠を置いた銀行。1885年10月に「初代」高岡銀行が開業したのが始まり。1889年4月に保証有限責任会社高岡銀行がその業務を継承し、1894年1月に「2代目」株式会社高岡銀行に改組した。1920年6月に高岡共立銀行と新設合併して「3代目」高岡銀行が設立されたが、その後も周辺の銀行の吸収・合併を続け、規模を拡大した。その後、戦争遂行のための国策として「一県一行」の方針が採られたことから、富山市を拠点としていた十二銀行と富山銀行や砺波市を中心に営業していた中越銀行と合併して北陸銀行となり、その歴史を終えた。（北陸銀行調査部百年史編纂班編 1978；藤井 2010）

【コレクションとの関係】

1936年7月22日に高岡銀行上市支店が富山県中新川郡上市町で集めた履物などをコレクションに加えた。

----- 執筆者：井上潤

● 田子町教育委員会（?-?）

たっこまちきょういくいいんかい

【事績】

田子町は、青森県三戸郡に位置する地方自治体。日本の地方自治体（都道府県や市町村など）は、地方自治法や地方教育行政法などにもとづき、教育行政の組織として教育委員会を設けている。田子町教育委員会は、田子町全体の教育行政をつかさどる機関。

【コレクションとの関係】

1963年5月20日に青森県三戸郡田子町で集めた「いざり機」をコレクションに加えた。

----- 執筆者：飯田卓

● 致道博物館（1950- ）

ちどうはくぶつかん

【事績】

1950年に鶴ヶ岡城内の旧庄内藩庁跡地に設立された博物館。管理運営は、1952年の博物館法施行以後、旧庄内藩主酒井家の当主 酒井忠良氏の寄付で設立された財団法人以文会がおこなった。酒井氏は、地方文化の向上発展のため、土地と建物だけでなく旧藩校致道館の資料も寄付した。1962年財団法人致道博物館と改称。2012年の公益法人改革により、公益財団法人致道博物館に移行した。

同館の土地は旧鶴ヶ岡城の三の丸にあたり、敷地内には「旧庄内藩主御隠殿」や「酒井氏庭園」（1976年に国指定名勝）がある。また、1956年に民俗資料展示場として「民具の蔵」を開設して以降、1957年に「旧鶴岡警察署庁舎」（1884年創建、2009年に国指定重要文化財）や1965年に「旧渋谷家住宅」（1822年創建、1969年に国指定重要文化財）、1972年に「旧西田川郡役所」（1881年創建、1969年に国指定重要文化財）などを移築復元し、歴史的建造物の保存と公開につとめている。

また、同館は「生活文化財」の意義を認め、早くから民具の収集保存にもとりくんできた。2017年現在、次の8つの国指定重要有形民俗文化財を収蔵している。「庄内のぼんどりコレクション」116点（1963年指定）、「庄内の木製酒器コレクション」77点（1964年指定）、「庄内の仕事着コレクション」126点（1966年指定）、「大宝寺焼コレクション」234点（1971年指定）、「庄内および周辺地のくりものコレクション附工具」229点附21点（1972年指定）、「庄内浜及び飛島の漁撈用具」1,937点（1976年指定）、「最上川水系の漁撈用具」810点（1982年指定）、「庄内の米作り用具」1,800点（1990年指定）。（八幡編 1958；社団法人日本博物館協会編 1978；酒井 1987）

【コレクションとの関係】

1954年7月に曲物のおかず入れと背負籠、1958年1月に背中当を日本民族学協会附属民族学博物館（保谷民博）に寄贈した。なお、1958年に致道博物館で開催された「燈火のうつりかわり」展（会期 9月27日から10月7日まで）に対しては、保谷民博から燈火用具25点が貸出されている。

----- 執筆者：木村裕樹

● 東京都武蔵野郷土館 (1954-1991)

とうきょうとむさしのきょうどかん

【事績】

1948年に東京都井の頭恩賜公園自然文化園にあった建物の貸与を受け、武蔵野文化協会が運営した武蔵野博物館を前身とする。1953年11月に都に移管され、1954年1月に都立小金井公園に移転、開設された。館内展示と野外展示を併設している。1991年に閉館したが、武蔵野郷土館旧蔵資料は、1993年に同地に建設された江戸東京博物館分館 江戸東京たても園に継承されている。なお、同園に今日展示されている奄美の高倉は、日本民族学協会附属民族学博物館（保谷民博）から移築されたものである。（八幡編 1960; 社団法人日本博物館協会編 1978; 西東京市・高橋文太郎の軌跡を学ぶ会編 2008; 松井 2012; 加藤 2012; 公益財団法人東京都歴史文化財団 江戸東京博物館 江戸東京たても園編 2013）

【コレクションとの関係】

東京の王子稲荷神社（現、東京都北区岸町）境内で毎年1月に売り出される火防の凧2点（奴と宝）をコレクションに加えた。1935年頃の収集品である。なお、1960年1月に同館で「凧展」を開催したのに際して、保谷民博からは「沖縄の凧など7点」を貸出している。

----- 執筆者：木村裕樹

● 東宝 (1943-)

とうほう

【事績】

正式名称は東宝株式会社。映画の撮影ならびに配給に関わる会社で、その社名は「東京」「宝塚」に由来する。その前身のひとつは、1932年に阪神急行電鉄（現 阪急電鉄）の小林一三が設立した株式会社東京宝塚劇場、もうひとつは、1937年に写真化学研究所（PCL）などが合併してできた東宝映画株式会社。1943年に両者が合併し、東宝株式会社となった。映画黄金時代に発表された数々の名作映画のほか、1940年代後半に激しさを増した労働組合運動（東宝争議）でも知られる。（東宝五十年史編纂委員会編 1982）

【コレクションとの関係】

1958年から1959年にかけて北海道や東京で集められた資料数点をコレクションに加えた。うち4点は、映画「コタンの口笛」の撮影で用いられた白や杵、墓標。採集者は「東宝撮影所」とあるが、東宝株式会社の撮影所という意味だろう。もう1点は「日本誕生」の撮

影で用いられたいざり機で、採集地は東京都、採集者は「東宝映画株式会社」とある。東宝映画株式会社は、1943年に合併を経て社名を東宝株式会社に変更したので、この記述は正確でない。

----- 執筆者：飯田卓

● 日本青年館（1921- ）

にほんせいねんかん

【事績】

明治神宮の造営にあたって勤労奉仕をした青年団の功績をたたえるとともに、各地の青年団が東京に来たときに利用できる施設。1920年に建設の議が起こり、「1人1円」を合言葉に全国の青年団員による募金活動などが展開され、1922年12月に着工の運びとなった。162万円の工費により、地上4階（のち5階）地下1階の日本青年館が1925年10月に完成した。約500名を収容できる宿泊施設のほか、2000名を収容できる講堂や図書室、新聞雑誌縦覧室、資料陳列室、談話室などを備えていた。団体としては、1921年に財団法人日本青年館が文部省から認可を受けて発足し、初代理事長に近衛文麿が就任した。その後、社会教育の振興や青年団の発展に尽力した田沢義鋪が1934年に理事長に就任し、日本青年館の活動をリードした。

【コレクションとの関係】

1936年に宮城県黒川郡落合村で集めた履物をコレクションに加えた。

----- 執筆者：井上潤

● 日本民族学協会（1942-1964）

にほんみんぞくがくきょうかい

【事績】

1934年に設立された日本民族学会を前身とする財団法人。文部省が管轄する民族研究所の設立が決まった1942年、日本民族学会は民族研究所の支援を目的とする外郭団体に再編され、民族学協会と改称された（民族研究所の設立は1943年）。1945年に民族研究所が廃止されたのちは、日本民族学協会と呼ばれるようになり、学会組織としての側面と財団法人としての側面とを備えていたが、1964年に両機能が分離し、学会機能は新生の日本民族学会（2004年に日本文化人類学会と改称）に、財団機能は財団法人民族学振興会（1999年に

公益信託渋沢民族学振興基金に改組)に継承された。

附属博物館(保谷民博)は1937年に創設され、1938年に建物が竣工、1939年5月21日に展示場の一般公開を始めた。1943年頃には大々的な資料整理がおこなわれている。1944年、戦況悪化にともなって展示場が閉鎖されるが、1951年頃から活動が活発化し、1952年5月1日に再公開されるようになった。しかし、日本民族学協会の資金不足と建物の老朽化を理由として、1962年に保谷民博は閉鎖された。(日本民族学会編 1966; 財団法人民族学振興会編 1984; 飯田・朝倉編 2017)

【コレクションとの関係】

国立民族学博物館が有する保谷民博旧蔵資料は、前身の日本民族学会の時代すでに形成途上であり、さらにその前を遡れば、渋沢敬三が主宰したアチックミュージアムがコレクションの基礎を築いている。日本民族学協会が活動していた時期、これらの資料は、東京都保谷村(のちの保谷町、保谷市、現在の西東京市)にあった保谷民博に展示・保管され、保谷民博が閉鎖されて以降は、文部省史料館(のちの国文学研究資料館史料館、現在は国文学研究資料館に統合)を経て国立民族学博物館へと移管された(国立民族学博物館での受入は1975年)。

資料が保谷にあった時代にまとめられた資料管理原簿によれば、保谷民博の敷地に奄美大島の高倉が移築されたさいの資料が、日本民族学協会によって「採集」されている。しかし、実質的には、すべての保谷民博資料が日本民族学協会と関わったと言ってよい。

----- 執筆者：飯田卓

● 阪急電車 (1907-)

はんきゅうでんしゃ

【事績】

正式名称は阪急電鉄株式会社で、阪急電車は略称。京阪神地方を結ぶ私鉄会社。1907年に小林一三が創業し、箕面有馬電気軌道、阪神急行電鉄、京阪神急行電鉄を経て、1973年に阪急電鉄と社名変更した。2006年に阪急阪神ホールディングスの中核企業の一つとなり、都市交通事業、不動産事業、エンタテインメント・コミュニケーション事業をおこなう。

創業者 小林一三は沿線の住宅開発をすすめるとともに、ターミナルデパートの先駆けとなる阪急百貨店を開業したほか、宝塚唱歌隊(後の宝塚歌劇団)を結成するなど、文化事業にも注力した。(京阪神急行電鉄事業部編 1959; 八幡編 1959; 阪急電鉄株式会社編 1982)

【コレクションとの関係】

同社が1911年に営業を開始した宝塚新温泉（後の宝塚ファミリーランド、2003年閉園）では、催事の一環として種々の展覧会がひらかれた。阪急電車事業部が寄贈した群馬県高崎の張子達磨7点と熊本県の山鹿灯籠1点は、毎日新聞社主催の「日本民俗博」（会期1959年3月20日から5月31日）にて出品されたものである。なお、同展には、日本民族学協会附属民族学博物館（保谷民博）から多数の民具も貸し出されている。

----- 執筆者：木村裕樹

● 落原同人（1932-1938）

ふきはらどうじん

【事績】

雑誌『落原』に寄った人々。『落原』は謄写版の雑誌で、長野県上伊那郡伊那富村（現辰野町）の伊那富小学校の教員が中心になって創刊した。発行団体は「落原民俗研究会」。前身は同校の矢島麟太郎が中心となっていた『郷土』という雑誌で、1927年から1929年12月まで発行されていた。柳田国男の書生をしていた野沢虎雄も帰郷後に参加しており、地理学や民俗学の分野で郷土を調査研究する同人が集まった。なお、この雑誌は、1930年から池上隆祐や有賀喜左衛門らが編集発行した『郷土』とは別の雑誌。上記『郷土』廃刊の後、1932年2月に野溝義男の呼びかけで、『郷土』の後継雑誌をめざして『落原』が創刊され、1938年11月の第4巻1号まで発行された。主な同人は、竹内利美、長田尚夫、井上正文、中村寅一、黒河重則らであった。質の高い民俗調査研究を維持することができた理由のひとつは、同じ上伊那郡で隣接する朝日村出身の社会学者 有賀喜左衛門から指導を得られたことがある。1933年には、渋沢敬三が資金を出し、5人の落原同人を東京のアチックミュージアムに1週間滞在させ、渋沢本人やアチックミュージアム同人らが民俗学の指導を授けた。このとき上京した竹内利美は、後に『小学生の調べたる川島村郷土史』をまとめ、アチックミュージアムから出版することとなった。

『落原』が創刊された当初、同人各自が原紙を切ってプリントしていたが、1933年12月に刊行した第2巻2号からは、松本市で白塔社を興していた赤羽王郎が実費で印刷を担当した。赤羽王郎は、永井龍一が翻刻出版した『南島雑話』や、池上隆祐が復刻した柳田国男『石神問答』の謄写印刷も手がけた人物である。（中村 1954）

【著作】

竹内利美『小学生の調べたる上伊那川島村郷土誌（アチックミュージアム彙報 第2）』アチックミュージアム、1934年。

竹内利美・長田尚夫・井上正文『南伊那農村誌』山村書院、1938年。

【コレクションとの関係】

1933年に長野県上伊那郡朝日村で集めた綿打ちの道具と綿を4点寄贈している。『落原』同人が渋沢敬三の招きで上京した際に寄贈したものと思われる。

----- 執筆者：小島摩文

●北方文化博物館（1946- ）

ほっぽうぶんかはくぶつかん

【事績】

新潟県中蒲原郡横越村沢海（そうみ）（現 新潟市江南区）の大地主7代 伊藤文吉が農地改革を機に遺構保存を目的として設立した博物館。伊藤個人の資産寄付によって財団法人北方文化博物館が設立されたのは1946年のことで、戦後に設立された私立博物館の第1号である。1952年に博物館法が施行されると同時に登録博物館となった。「北方文化博物館」という名称は、スウェーデンの北方民族博物館（Nordic Museum）に由来する。

建物は1887年に創建されたもので、室町様式回遊式大庭園を備えた主屋を中心とする「豪農の館」である。当初は、大地主時代のコレクションに各所から出陳された文化財を加えて年3回のテーマ陳列をおこなっていたが、文化財保護法が施行されて以後は、「豪農の館」の保存公開を主目的として館蔵品の優品を少数展示するようになった。主な収蔵品は、中国古陶磁をはじめとする美術工芸品、考古資料、民俗資料などである。邸内には、野外展示を意図した古民家も移築復元されており、主屋を中心とする主要建造物は2000年に国指定登録有形文化財となった。また、分館として新潟市中央区の「新潟別邸」（2000年に国指定登録有形文化財）がある。

館長を歴任した8代文吉は「心と癒しの場としての博物館」を目指し、野外音楽堂やレストラン、宿泊施設などを開いて多角的な経営をおこなった。（宮本馨太郎編 1951a; 1951b; 社団法人日本博物館協会編 1978; 金山 2001）

【コレクションとの関係】

1951年7月に新潟県で収集された背負梯子、背中当、背負籠、担い棒、堅杵を、1952年2月に同じく新潟県の金魚車を、日本民族学協会附属民族学博物館（保谷民博）に寄贈した。なお、保谷民博から北方文化博物館へは、1950年に「日本の竹製品竹工具全般に関する資料」を、1951年に「燈火発達に関する標本一括」を貸出している。

----- 執筆者：木村裕樹

● 卷町公民館（?-?）

まきまちこうみんかん

【事績】

卷町は、新潟県西蒲原郡にあった町。2005年に市町村合併によって新潟県新潟市西蒲区の一部となった。公民館とは、1949年に制定された社会教育法にもとづき、生活と密接に関わる教育文化活動をおこなっていくための施設。地方自治体としての卷町も、町民の教育文化活動を支援する目的で公民館を運営していた。

【コレクションとの関係】

1953年から1954年にかけて集めた鯛車をコレクションに加えた。

----- 執筆者：飯田卓

● 八基村青年団血洗島支部（?-?）

やつもとむらせいねんだんちあらいじましぶ

【事績】

八基村は、1890年から1954年にかけて埼玉県大里郡にあった自治体。現在の埼玉県深谷市北西部にあたり、横瀬、南・北阿賀野、町田、血洗島、上・下手計（てばか）、大塚の八ヶ村が一つとなってできた。現在でも八基地区といわれるこの地、とりわけ血洗島は、天正期（1573-1591年）に開かれたといわれる。その当初からの由緒を持つ家に渋沢家がある。渋沢敬三の祖父 栄一は血洗島で生まれ、少・青年期を過ごした。畑作を中心とした農業地帯であったが、近世の比較的早い時期から商品・貨幣経済が浸透し、農作以外にも藍玉の製造・販売や養蚕がさかんに行われた。（近藤編 2001）

【コレクションとの関係】

埼玉県大里郡八基村のさまざまな民具約40点をコレクションに加えた。信仰や日常生活に関するものも含まれるが、中心は生産活動に関するものだった。なかでも特徴としてあげられるのは、蚕網や器械簇など養蚕関係のものと、藍植鋏など藍玉製造に関連するものである。採集期や収蔵期が判明しているものは、すべて1934年11月。

----- 執筆者：井上潤